東京外国語大学海外事情研究所, *Quadrante*, No.22, (2020)
Tokyo University of Foreign Studies, Institute for Global Area Studies, *Quadrante*, No.22, (2020)

◆書評 1 ◆

犬とワンちゃんと私

Dogs, doggies and me

村上　正樹
MURAKAMI MASAKI
日本獣医生命科学大学獣医学部
Nippon Veterinary and Life Science University, Faculty of Veterinary Science

キーワード
犬の人間化　野犬　獣医師教育

Keywords
humanization of dog; feral dog; veterinary education

原稿受理日：2020.1.31.
Quadrante, No.22 (2020), pp.121-124.

目　次

1. 野良犬がいた風景
2. 犬からワンちゃんへ
3. ワンちゃんの進む道
おわりに

1. 野良犬がいた風景

最近めっきりと野良犬を見なくなった。20歳前後の「同期の」学生たちに聞いてみると、生まれてこのかた見たことがないという。ガキの頃はよく見かけたものだと話すと、いつの時代の話だとジジイ扱いされてしまった。たしかに再受験組の私は彼等と一回り近く年が離れているとはいうものの、あんまりである。しかし、いったいいつから野良犬を見ていないだろう。レトロなものは何かともてはやされる傾向にあるが、野良犬が町おこしに使われた例を私は知らない。しかし、一定の年齢以上の方にとってみれば、野良犬は昔日の光景を思い出すうえで欠かすことのできない重要なアイテムではないかと思う。

私は瀬戸内海の沿岸部に位置する町で生まれ育った。古くから周辺地域で切り出された木材の集積場として栄えたところで、歴史があるといえば聞こえは良いが、海と山に挟まれた猫の額のような平地に建物が密集して立ち並ぶ様は、いかにも下町という風情であった。収まりきらなくなった家屋が土地を求めて斜面の上へ上へと連なっているので、日が暮れると山のかなり上のほうにまで明かりが灯り、この地域独特の奇妙な景観を形作っている。港には大きな貯木場があり、かつては数多くの製材所や木工所が操業して活況を呈していたのだが、私が物心ついた時分にはもうすっかり下火になり、人気のなくなった工場は子供たちの格好の遊び場と化していた。工場の中には古びた機械や材木がごろごろしていて、時間を忘れて遊んだものである。そうこうしているうちに西日が差し始めると、ほぼ毎回きまって野良犬にでくわした。大きく、真っ黒に汚れ、それでいて鋭い眼光を放つ眼をじっと向けて様子をうかがっている野良犬たちは、物心ついたばかりの少年たちを恐怖させるのに十分な存在だった。今から考えると信じられない話だが、当時少年たちは迫りくる野良犬の恐怖と日々闘っていたのである。余談ではあるが、私の

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

祖父は幼少期に犬に噛まれ、以来大の犬嫌いであった。ひょっとすると幾分かその影響をうけているのかもしれない。ともかく、私は犬が苦手だった。

当時すでに時代は平成であったが、下町に漂うルーズな雰囲気は、いまだ昭和の香りを色濃く残していた。犬は外飼いが当たり前、放し飼いすら平然と行われていた。あたり構わず餌付けするような人も珍しくなく、さながら本書第18章において述べられているブータンの都市部に近いような状況だったのかもしれない。昔の話とはいえ、さすがに当時も野良犬を地域の共有物だと考える人間は皆無だっただろうが、日常の光景の中にそれは確かに存在していたのである。おそらく咬傷事故が少なくなかったと思われ、狂犬病予防の観点からも、通りを野良犬が闊歩する光景は歓迎されざるものだったに違いない。その後、犬の放し飼いが事実上禁止されるなど、行政の地道な努力が実を結び、野良犬は日本の街中からほぼ駆逐され（少なくとも都内で見かけることはほぼない）、人間が野良犬におびえて暮らす必要はなくなった。公衆衛生上極めて重要な、素晴らしい成果といえよう。しかし、安全と引き換えに日本人は犬を恐れるという経験を失ってしまったのではないだろうか。

2. 犬からワンちゃんへ

先日、故郷からほど近い工業都市で、都市公園に野良犬の群れがたむろして問題になっている、というニュースを耳にした（図1）。どうも町の野良犬は過去の遺物というわけではないようだ。ただし、動物愛護団体が幅をきかせている現代においては、野良犬の捕獲も容易でないらしい。他所の例を挙げると、沖縄本島に生息する絶滅危惧種のヤンバルクイナは、現地の野犬に捕食されるケースが多いそうである。ヤンバルクイナを保護するため野犬を駆除しようにも、犬を殺すとはけしからん、と抗議の声が多く寄せられ、野犬侵入防止の柵を設置するにとどまっているとのことだ。生涯で一度でも野良犬と鉢合わせていれば、その危険性は認識できると思うのだが、犬が人や環境に危害を加えるなんて微塵も思ってないのであろう。感情が理性を上回るとかくも正常な判断が出来なくなるのだろうか。これらのケースは、安全となった社会の弊害といえる。考えようによっては幸せなことなのかもしれない。

このようなことを書いていると、私が犬を心から憎んでいると思われるかもしれないが、それは事実と異なるという点だけご留意いただきたい。犬を愛すべきもの、守るべきものと考えるのが当然で、そうでない者は異端だといわ

【図1】 山口県周南市における「ワンさん」御一行
（出所：周南市環境政策課ホームページ「野犬の現状と取り組み」）
出所：https://www.city.shunan.lg.jp/soshiki/18/1348.html（最終アクセス2020年2月3日）

んばかりの、いわば全体主義的な社会の風潮に対して私は猛烈な違和感を抱いてきたのである。そういう事情もあり、当初本書の書評を依頼されたとき、正直戸惑いを禁じえなかった。獣医学を学ぶ者としての観点から意見を述べてほしいということだったのだが、さして犬好きでもない私が犬に関する書籍について的確な論評ができるか自信がなかったのだ。ましてや本書の内容が犬を人間のパートナーとして信奉する内容だったらどうしようか、と半ば戦々恐々としていた。しかし、それらは杞憂に終わった。本書第15章で菅原和孝先生が犬の「かわいさ」と「こわさ」の二面性について実例や創作の例を挙げながら、犬そのものの存在を定義しているのをはじめとして、コラム4にて牛山美穂先生が「犬の人間化」について、犬と人間の間の境界が曖昧になっていく現在社会に対して疑問を呈するなど、犬の「こわさ」に関する論述が少なくやや物足りなさを感じたものの、本書は犬と人間の関係性を多様な視点でバランスよく述べていると感じた。

牛山先生が述べているように、現代日本では「犬の人間化」が甚だしいと感じる。犬が服を着て街を闊歩し、犬用のケーキなんてものが売られている光景も珍しくなくなった。極めつけには、人間が犬をカートに乗せて散歩している。果たしてこれは犬の散歩といえるのか、止むを得ぬ事情で動くことが出来ないのならまだ理解できるのだが、カートの中から身を乗り出して尻尾を振っている様子から、そういった理由ではないのだろう。飼い犬になにか弱みでも握られているのだろうか。他人事ながら、犬にとって却ってストレスになっているのでは、と心配になる。

ここでひとつ獣医学生らしいエピソードを付け加える。私はいま獣医学部3年生であるが、4年生から5年生に上がるためには全国共通の進級試験のようなものを受けなくてはならない。そこで診察の実技テストがあるのだが、飼い主の前では犬猫のことを、ワンちゃん、ネコちゃん、と呼ばなくてはならないのだそうだ。飼い主にしてみれば自分の家族同然の存在を「いぬ」、「ねこ」と片づけられるのは気分のいいことではないだろうが、幼稚園児じゃあるまいし、これは一体どうしてしまったのだろうか。馬鹿にするな、と却って怒り出す飼い主もいるのではないかと思う。でもそういわないと留年だ。もはや現代の踏み絵である。

3. ワンちゃんの進む道

本書の第1部および第2部で述べられているように、古来犬は人間のパートナーとして人間社会とともに共存していた。しかしそこには人間と犬を隔てる明確な境界が存在し、そして厳密に守られてきた。現代においても、犬を狩猟など生活の術として用いている人々は主従関係に厳格で、犬が命令に背いた際は殺すことも厭わない。なぜなら命令に応じない犬の存在は自らの死に直結するからだ。私自身狩猟を行うが、その際は猟犬の力を借りる。前述の例ほどではないにせよ、日本においても猟犬は人間と明確に区別され、徹底した主従関係の下使役される。しかし愛玩動物としての犬を考えたときに、犬と人間の間の境界がどんどん曖昧になっているのは間違いないだろう。牛山先生は、種の異なる人間と犬とは同化が進み、種が同じであるはずの人間同士の境界が一層増してきた、と述べている。全く同感である。ムラの共同体から国家が誕生し、紆余曲折を経て民主主義が生まれ、人間個人の意思が尊重されるようになった結果が、異種間の境界を得る代わりに同種間の境界をつくりだすこととなった。なんとも皮肉な結果ではないだろうか。

池田光穂先生は文中で、『家犬文化総合史』での記述に反論して最後にこう述べている。「人間こそが犬にとっての《愛情の寄生虫》なの」だと（本書450頁）。胸がすく思いがした。彼らが人間のように扱われているのは、人間の代わりに接してくれる対象を求める人間が存在

するからに他ならないのだ。寄生虫というものは宿主がいないと生存していけない。人間がすでに犬なしでは種を存続しえない状況にあるとすると、犬、もといワンちゃん達は、その小さな体で全人類の命運を担っているといえる。彼らもまた、自らに課せられた役割を精一杯果たしているのだ。だが彼らはそんな事実を知る由もない。今日も彼らは自分のご主人を純粋無垢に信じ切って尻尾をふるのである。じつに健気な生き物ではないか。そう考えてみると、ワンちゃん、なんて呼び方も我慢できそうな気がしてきた。いや、ここは敬意を表してワンさんといくべきか。